

審査の結果の要旨

氏名 上出 徳太郎

本論文は、18 世紀後半から 20 世紀前半に至る時期の新疆の財政構造について考察したものである。とくに、清朝や中華民国の中央政府が、新疆への送金などの形で新疆の財政を支えていた点に注目して、歴史的な変化を考察している。

まず第 1 章では、清朝の協餉制度に焦点をあて、新疆の財政のありかたについて論じた。協餉とは、清朝の中央政府の指令に基づいて或る省などから別の省などへと財政資金を移転する制度のことである。清朝はこの協餉によって新疆の統治を安定させていたことが指摘された。

第 2 章では、19 世紀後半におけるムスリム反乱およびロシアのイリ派兵という危機の時代において、清軍の作戦がどのように財政的に支えられていたのかについて分析した。第 3 章では、1884 年に新疆省が設置されたことの財政史的な意味について論じた。これによって、新疆に存在した部隊に個別に送金する方式が次第に整理され、新疆省としての財政的な一元化が進んだことを結論づけた。

第 4 章では清末の時期の協餉の実態について分析した。新疆省の成立当初は、協餉はほぼ規定どおりに届けられていたが、1907 年以降にはあまり届かなくなり、これが兵士の不満などの社会不安につながったことを指摘した。

第 5 章は 1910 年代から 1920 年代に新疆を支配した楊增新政権、第 6 章は南京国民政府およびソ連と微妙な関係を保っていた盛世才政権について、その財政について考察し、いずれの政権も紙幣価値の安定が大きな課題であったことを論じた。また、各時期の中央政府との関係もまた財政を維持する上で重要な意味を有していたことを解明した。

以上の内容をもつ本論文は、それぞれの時代の公文書のなかから、財政収支に関わる数値を見出して、整理したことを議論の基礎としている。膨大な史料に基づいて、財政収支の実態に迫ろうとした労作と評価することができる。ほぼ 2 世紀にわたる新疆の財政について可能な限り定量的に分析し、その歴史的変化について論じることを通じて、新疆の財源にとって、中央政府の指示によって他の省などから財政資金が移されていたことが重要な意味を有していた点を明確に指摘した。

新疆と中央政府との関係には時代とともに質的な変化がみられたと言えるのか否か、更に古い時代から構造的に存在するとも思われる財政の仕組みについて本論文として如何に考えるか等、いっそう考察を深めていく余地もあるとはいえ、本論文で達成された成果の大きさに基づいて、審査委員会は博士（文学）の学位を授与するにふさわしいと判断する。